記　事

例会記録

平成21年3月例会　平成21年3月28日（土）
順天堂大学医学部10号館4階403番
カンファレンスルーム

1. 「載曼公唇舌図訣」の背景と考察　西巻　明彦
2. 慢性胃炎の歴史―我々は何故ピロリ菌を発見できなかったのか　多賀須幸男

平成21年4月例会　平成21年4月25日（土）
順天堂大学医学部10号館4階403番
カンファレンスルーム

1. 戦前日本の医学と権威：脚気論争の二，三の問題について　Alexander Bay
2. 関戸家本病草紙にみられる指先の方向性の考察　西巻　明彦

平成21年5月例会　平成21年5月23日（土）

1. UCSF（カリフォルニア大学サンフランシスコ校）に所蔵する古医書（善本類）　町　泉寿郎
2. 東アジアのランダム化比較試験の歴史―脚気論争・731部隊・結核―　津谷喜一郎

例会抄録

ナイチンゲール伝染病論の社会性

友松　憲彦

イギリスのヴィクトリア時代（1837～1901年）は，工業化（産業革命）と都市化により社会・経済問題が深刻化し，一方でそれに対するさまざまな社会改革が試みられた時代であった．フローレンス・ナイチンゲールはこの時代の人であり，クリミア戦争帰国後は実際の看護からは遠ざかり，陸軍衛生改革，病院改革，公衆衛生改革，看護教育，地域医療等の社会改革に取り組んでいる．これらの事業は，「クリミア戦争の偉業ほど輝かしいものではないが，はるかに重要な仕事」（ストレイチー）であったとも評される．ナイチンゲール社会改革の性格を伝染病論の視角から解明するために，彼女の伝染病認識をヴィクトリア時代の伝染病論のなかに位置づけ，それが後年の社会改革をどのように規定したかを明らかにする．

ナイチンゲールの著述には，看護にとって「清浄な空気」や「換気」が重要であることが繰り返し説かれている．従来ほとんど無視されるか，誤って理解されてきたこの言説の含意を，伝染病論の立場から解き明かすことが糸口となる．

ヴィクトリア中期医学界には，伝染病について接触伝染説（「コンタギオン」contagion＝「接触性病原体」との接触による感染）と環境説（「不潔な空気」の吸入による感染）の対立があった．さらに接触伝染説はコンタギオンが身体内でしか増殖しないとする「厳密派」と，身体外での増殖可能性を認める「修正派」に分かれ，環境説にも「不潔な空気」が動植物質有機物の腐敗から発生

するとする「ミアズマ（瘴気）miasma」説と，特殊な大気現象によるとする「伝染性大気 epidemic constitution」説があった．医学界では「修正派」接触伝染説が主流であったが，公衆衛生改革者エドウィン・チャドウィックの周辺に集まったサウスウッド・スミス，J. P. ケイ（J. P. ケイ-シャトルワース），N. アーノットらの医師は「伝染性大気説」の立場をとった．彼らは救貧法改革の取り組みのなかで貧困の原因として罹病や病死に着目するようになり，ミアズマの発生源である不潔物を迅速に除去するために公衆衛生改革（下水道普及）の必要性を主張し，1848年「公衆衛生法」と「中央衛生局」（General Board of Health）を実現する．サウスウッド・スミスはすべての病気を「本質的な病」（essential disease）のヴァリエーションと考え（一元的病理説），物理的な外的条件（大気その他の環境）の変化によって病気の形態が変化し発展するとした（病気発展論）．公衆衛生改革派の伝染病認識は急進的な環境説であり，特定の行政目的（公衆衛生改革）と結びつく強い社会性を帯びた伝染病認識であった．

一方，ナイチンゲールの伝染病認識に決定的な影響を与えたのは，クリミア戦争で自らの管理下にあったスクタリの病院で5ヵ月間に死者5千をだした悲惨な体験であった．帰国後，スクタリの惨状が軍首脳の無能と非情による兵站の不備であることを立証するために，公衆衛生改革派の統計専門家ウィリアム・ファーを指導者として統計的検証をおこなった．しかしその結果，病院での高死亡率の原因は「食糧や物資不足」（兵站の不備）ではなく，「汚れた空気」（病院の不衛生）であるとの予想に反する結論に1857年5月達した．高死亡率と「汚れた空気」の因果関係を認めることは，自らの看護過誤を認め，従来の自己主張を否定することであった．この苦悩が彼女を社会改革に向かわせた内面的原動力であったともいわれる．（ヒュー・スモール）いずれにせよ，彼女の伝染病認識はファーとの検証を契機に接触伝染説から環境説に転換し，それを病理学的に裏づけるためにサウスウッド・スミスらの伝染病論に接近したことは，1857年以降に執筆した著作が示している．

伝染病認識の転換はナイチンゲールの社会改革に濃い影を落としている．例えば，検疫が接触伝染説を根拠とする社会制度であることをもって批判している．また，当時の病院建築は接触伝染説を根拠にコンタギオンとの接触を断つために「隔離」型病棟が重視され，通風換気に無配慮なブロック式が多かった．彼女は通風換気を最優先するパビリオン式病棟（ナイチンゲール病棟）を提唱したが，それは「ミアズマ希薄化」の立場からする改革であり，ジェイムズ・シンプソン，ファーらの病院改革も同じ認識によるものであった．また，19世紀後半のアルバート・ナッパーに端を発する療養所の開設運動や転地療養の普及なども，「清浄な空気」を重視する理論の影響を受けた医療改革である．ナイチンゲールはクリミア戦争で得た社会的名声と上流社会との人脈をもって，チャドウィック失脚後の19世紀後半の公衆衛生改革の中心的存在となったが，その改革は環境説の立場にたつ伝染病認識に裏づけられている．

以上の総括として，(1) ナイチンゲールの伝染病認識はクリミア戦争帰国後に接触伝染説から環境説に転換した．(2) 彼女の伝染病認識は当時の医学界主流ではない公衆衛生改革派医師（サウスウッド・スミス等）の影響を受けた急進的な環境説である．(3) ナイチンゲールの社会改革（検疫制度批判，病院改革，公衆衛生改革等）は，彼女の伝染病認識との関連で理解すべきである．

（平成21年1月例会）